

北杜夫の『楡家の人びと』のドイツ語訳について

— 一日独語における諧謔表現の相違を探る端緒として —

宮 内 伸 子

北杜夫の『楡家の人びと』のドイツ語訳について

一日独語における諧謔表現の相違を探る端緒として¹⁾

宮内伸子

1. はじめに

本稿は、北杜夫の『楡家の人びと』をそのドイツ語訳と対照させることを通して、日独語における諧謔表現の相違を探る端緒とすることを目的としたものである。

本論に入る前に、北杜夫(1927-2011)について簡単に紹介しておこう。北杜夫(本名:斎藤宗吉)は、歌人の斎藤茂吉の次男として昭和2年に東京青山で生まれた。母、斎藤輝子は、『楡家の人びと』の舞台になっている精神病院「青山脳病院」の創立者、斎藤紀一の娘である。この斎藤紀一が楡家初代の楡基一郎のモデルである。北自身は、基一郎の娘婿徹吉の次男、周二として作品に登場する。周二がことさらにひねくれて覇気のない少年として描かれているのは、本人の照れもあるのかもしれない。²⁾

北は、旧制松本高校在学中に文学に目覚めたものの、父親の厳命により医学部に進学し、精神科医となった。しかしほどなく小説家としての活躍が始まる。軽妙な語り口が魅力の「どくとるマンボウ」シリーズのエッセイで広く親しまれたが、いわゆる「純文学」の他、児童文学やユーモア小説も手がけ、多くの文学賞を受賞している。³⁾

本稿の考察対象である『楡家の人びと』は1964年に発表された。トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』がこの作品執筆の直接的な動機になっていると言われている。『ブッ

1) 本稿は日本独文学会北陸支部研究発表会(2014年11月8日、於:金沢)での口頭発表「日独語における諧謔表現の相違を探る — 北杜夫の『楡家の人びと』のドイツ語訳を手がかりに —」に修正を加えたものである。

2) ドイツ語版のあとがきでは、周二は「ブッデンブローク」のハンノ少年に当たると解説されている(Klopfenstein(2010):S.978)。

3) 北杜夫の主な作品と受賞歴:

1959年『幽霊:或る幼年と青春の物語』

1960年『どくとるマンボウ航海記』

1960年『夜と霧の隅で』芥川賞

1964年『楡家の人びと』毎日出版文化賞

1986年『輝ける碧き空の下で』日本文学大賞

1998年『青年茂吉』『壮年茂吉』『茂吉彷徨』『茂吉晩年』大佛次郎賞

他に、『木精:或る青年期と追想の物語』等の純文学、「どくとるマンボウ」シリーズ(エッセイ)、『船乗りクブクブの冒険』『さびしい王様』等の児童文学やユーモア小説を執筆した。

デンプロック家』同様、ある一族の繁栄と没落が描かれている。ドイツ語版には『ブッデンプロック家』の副題にならって、原作にはついていない副題 *Verfall einer Familie* (ある一族の没落) が添えられている。

『楡家の人びと』は三部構成の長編大河小説である。各部の概要は次のとおりである。

第一部：楡基一郎を初代とする楡家三代の物語の始まり。基一郎が創設した「脳病院」が主な舞台となっている。第一部の終わりで病院が焼失、その後ほどなくして基一郎が急死し、大正時代も終わりを告げる。

第二部：次第に戦争に傾斜していく世相を背景に、楡家二代目の当主になった娘婿の徹吉や長男歐洲の姿を中心に物語が進む。徹吉は病院経営と家庭の不和に悩む。

第三部：時代は太平洋戦争に突入し、楡家三代目にあたる徹吉の子ども達が物語の中心になる。徹吉の長男峻一は応召され、南の島で飢餓にあえぐ。娘藍子、次男周二も戦争に翻弄され、そして終戦を迎える。

先にも述べたように、『楡家の人びと』は作者の一族をモデルにした大河小説である。とはいうもののフィクションの部分も多く、例えばモデル通りならば、楡家二代目の当主徹吉は斎藤茂吉ということになるが、徹吉は歌人ではない。執筆活動はするものの、精神病学の歴史を心血注いで書くという設定になっている。モデルに関する作者自身のことばを紹介しておく。

『楡家の人びと』のばあいは、もちろんフィクションを使ってはいるけれども、初めの大正時代の部分はかなり事実には則っている。⁴⁾

私は漠然とそれ（『楡家の人びと』）を書く時期を四十代と思っていたが、急に予定を繰上げることになったのは、自分の健康に自信を失ったためと、昔のことを知っている人たちがぼつぼつと死にはじめたからである。/ 親類の間をめぐって昔の聞き語りをとり、大正年間の新聞の抜き書きを作り、おぼろに第一部の輪廓ができたのは、昭和三十六年の初夏のことで、その八月十六日に筆をとりはじめ、昭和三十八年十二月十四日に稿を終えた。⁵⁾

2. 日本語原作とドイツ語訳（参考：英語訳）の対照

さて本稿は、『楡家の人びと』とそのドイツ語訳とを対照させることで、日独語による諧謔

4) 辻邦生との対談における北の発言（北/辻（1974）：89頁）。

5) 『楡家の人びと』（文庫版）の辻邦生による解説で紹介されている北のことば（Ⅲ /381頁）。

表現の違いを探る第一歩とすることをもくろんでいる。ちなみに、ドイツ語訳は2010年に出版された。⁶⁾ 英語訳はそれよりもだいぶ早く1984年に出ている。独英の他、チェコ語、ポルトガル語、ウクライナ語、ベトナム語、フィリピン語にも訳されている。⁷⁾

2.1. 語り手の立場の微妙さ・自在さ

作者が大いに影響を受けたという『ブッデンブローク家の人びと』と比較して日独語の諧謔表現の相違を探るのは、今後の課題としたいが、今回『検家』をそのドイツ語訳と対照させてみて、語り手の視点が西洋の小説とは大きく異なることに、あらためて気づかされた。語り手の視点が融通無碍というのか、自由自在というのか、とにかく一定していない。語り手の視点のこのような微妙さ・自在さが諧謔表現に与える影響は大きいと思う。というのもユーモアは対象との距離の取り方に関わっているからである。それではまず、語り手の視点の微妙さ・自在さの表れている箇所を具体的に示していくことから始めたい。

2.1.1. 誰の推量・印象・感慨か

地の文であるにもかかわらず、誰の推量か、誰が受けた印象なのか、誰がもった感慨なのか、その辺があいまいな文が原文にはかなり見受けられる。

- (1) なんでも活字を読みあげるのが愉しいらしいのである。(原作第I部21頁)

Doch das spielte keine Rolle, denn, wie es schien, bestand sein größtes Vergnügen darin, Wörter laut zu lesen. (ドイツ語訳S.23)

But what he enjoyed doing was reading the printed page out loud. (英語訳p.14)

- (2) 院代は先に述べたようにほそほそと瘦せた小男だったが、その服には皺ひとつなく、そのハイカラーはいやがうえにも固くぴんと首元に立っていた。(1/40頁)

Der Vertreter, wir sagten es bereits, war ein dünner, kleiner Mann von nachgerade mickriger Gestalt. Sein Anzug aus steifem Stoff wies nicht eine Falte auf, und sein noch steiferer Stehkragen schloss sich mit erbarmungsloser Härte um das Genick. (S.40)

As already mentioned, the Deputy was a thin, almost emaciated person, so small as to be virtually a dwarf. His suit was without crease or wrinkle, his high collar, even more unwrinkled

6) 本作の他にドイツ語訳がすでにある北の作品は『羽蟻のいる丘』と『夜と霧の隅で』の2作である (Klopfenstein (2010):S.972)。

7) 国際交流基金の日本文学翻訳書誌検索データベースによる (2015年4月閲覧)。

and creaseless, stood out starched and stiff about his neck. (p.26)

- (3) そうして賞与式の立役者であるこの三人が揃いも揃って小男であるところを眺めると、これは単なる偶然なのか、あるいは院長が自分の恰幅と品位を保つために小さな男ばかりを身近においているのかわかったものでないと思われてくるのだった。(I/61-62頁)

Angesichts der Tatsache, dass die drei Herren auf der Bühne, die im Zentrum der Gratifikationsfeier standen, einer wie der andere von geringer Statur waren, konnte man sich fragen, ob dieses Arrangement purem Zufall entsprang oder ob der Direktor zur Wahrung seiner würdevollen Erscheinung nur kleine Männer neben sich duldeten. (S.59)

An objective viewer of the Prize-Giving Ceremony might well have wondered why the three principals on the dais should all have been so small, and might well have asked himself whether this was pure coincidence or an attempt, perhaps, on the Director's part to maintain a dignified presence by appearing with two virtual dwarfs. (p.41)

これらはいったい誰の推測、誰が感じたことなのだろうか。(2)については、述べるのは語り手しかいないから、語り手であることは自明だが、(1)や(3)についても、日本語母語話者ならば、語り手の推測であり、語り手が受けた印象とふつつ受け取ることだろう。しかし、訳を見てみると、(1)はscheinenを用い(英訳は訳を省略)、(2)はwirを主語に、(3)はmanを主語にしている。熊倉千之は、一人称小説であろうと三人称小説であろうと日本語の作品からは消そうとしても語り手の声が聞こえてきってしまうと指摘しているが、⁸⁾『楡家』においても語り手の声は聞こえてくる。原作はそれを特に消そうともしていないが、訳においては西洋語による小説の規範から逸脱しない範囲で処理していると思われる。(2)のように、読み手をも巻き込むようなwirを用いるのは例外的であろう。

- (4) そればかりではない、広間全体にひそやかな、しかしどうにも堪えられない忍び笑いがひろがってゆく気配がした。(I/79頁)

Gleichzeitig hatte sie das Gefühl, dass der gesamte Saal von einem gedämpften, jedoch ununterdrückbaren Lachen erfasst wurde. (S.75)

At the same time, an odd sniffling sound started to circulate in the room. It was an infectious snigger. (p.53)

8) 参照：熊倉(2006)。

(4) は場に漂い始めた気配の描写であるが、ドイツ語では桃子のもった印象にされている。気配そのものより、その気配を察知した者の方が前面に出た訳になっている。⁹⁾ 英語訳は特に訳していない。

(5) これがひさとなると、一体峻一をどう思っているのか想像もつかなかった。(1/90頁)

Was Hisa hingegen für Shun'ichi empfand, war gänzlich ein Rätsel. (S.84)

In the case of Hisa, one could not even begin to imagine what she felt about Shun'ichi. (p.62)

(5) は一族の宴席に座っている徹吉の気持ちを描写したくだりにある。ここでは、語り手は徹吉の視点を取っている。ドイツ語も英語も、「誰にとって」想像がつかないかを明示しない訳になっているが、「徹吉には想像できなかつた」としてもよいところだろう。

(6) もっと驚いたことに、院長はものものしく耳鼻鏡を額につけ、患者の耳の穴を覗きこむことがある。(1/95頁)

Noch verblüffender war, wenn er sein Otoskop an die Stirn von Patienten legte oder damit in das Ohr eines Kranken spähte. (S.88)

Even more surprising was the use he made of the instrument normally used for looking inside people's noses and ears. (p.65)

(6) は原文では「驚く」が動詞で使われているために、「誰が」驚いたのかを感じさせる。しかし、ドイツ語訳ではverblüffend (驚くべき)と形容詞にして、驚いた主体が誰なのかは問わない表現になっている (英語訳も同様)。

(7) その並外れた図体は決して恵まれた良質の発育の結果とは見えなかつた。むしろ一種の畸形、自然に反した異常発達、脳下垂体ホルモンの分泌不均衡による肉体の滑稽な膨張と思われた。(1/112頁)

Seine außergewöhnliche Größe machte nicht den Eindruck, als sei sie das Ergebnis eines gesunden, gesegneten Wachstums, vielmehr schien sie eine Art Deformation zu sein, eine groteske Anschwellung des Körpers infolge einer ungewöhnlichen Entwicklung wider die Gesetze der Natur, verursacht von einer unausgewogenen Produktion des Hypophysenhormons. (S.102)

9) 「空気」の訳に関しては、宮内 (2009) も参照されたい。

Seen for the first time, his exceptional size gave no impression of a fine (let alone the finest) physique, of a blessing bestowed on him by nature; it seemed more an aberration, a deformity indeed, an unnatural, ludicrous swelling brought about by some imbalance in the secretions of his pituitary gland. (p.78)

(7) は語り手にとっての見え方であり、語り手によって思われたことであるが、ドイツ語訳では、そう思わせた対象の方を主体にすることで、¹⁰⁾ 語り手の声を薄めている。英訳も同様の対応である。

(8) 院長はしかし大して落胆もしないように見えた。(I/131頁)

Der Direktor allerdings schien dadurch nicht sonderlich entmutigt. (S.120)

The shock did not appear to affect the Director all that much; (p.91)

(9) たしかに桃子は、性と恋愛とやらについて津々たる興味を抱いたようだった。(I/181頁)

Ja, wie es schien, besaß Momoko ein nicht zu stillendes Interesse an Themen wie Sex und Liebe.

(S.161)

Momoko became fascinated by the subjects of sex, sexual love, passion and so on. (p.125)

(8) と (9) も、(7) と同様、対象が発する印象の方を主体にして訳すという対応が取られている。

(10) その結婚はいかにも秘密に包まれているように思われた。(I/213頁)

Sie hatte das Gefühl, dass die Heirat geheimnisumwittert war. (S.186)

The whole marriage had been veiled in secrecy. (p.145)

(10) は文脈から、語り手が桃子の視点に立っているのがわかる。それを受けてかドイツ語訳は sie (桃子) を主語にして、桃子がそのような気持ちを抱いた、という訳にしている。英語訳は「思われた」を特に訳していない。

(11) 徹吉は、一度目覚めたようだった。(…)/このところ、ひっきりなしに、毎晩のように

10) このような翻訳の際の対処法は、三島由紀夫の比喩の翻訳の際にも見られた。参照：宮内 (2011) : 108-112 頁。

夢を見る。その対象が次第々々に、むかしへ、過去へと遡ってゆくようである。(1/245頁)

Er schien kurz zu erwachen. (…)/ Seit einiger Zeit träumte er fast jede Nacht, und allmählich reichten die Träume weiter zurück – zurück in seine Vergangenheit. (S.210)

At this point Tetsukichi seemed to wake up, (…)/ For some time now he had been dreaming every night, and each night the dreams went further back into his past. (p.165)

(11) の一つ目の「ようだった」は語り手による推測を含んだ描写といえるので、ドイツ語訳も *scheinen* (英語 *seem*) を用いている。二つ目の方は、徹吉視点による想像であり、自分のことなのに断定しないのは西洋語においては過剰な曖昧さと感じられるのか訳されていない (英語訳も同じ)。

(12) ……へんに肌寒かった。まだそれほど冷える夜ごろではないはずなのに、ぞくぞくと皮膚の表層に鳥肌が立つような気がした。(…) 胸の内部に慢性に燃える熱源があり、それが全身をほてらせ、ただ皮膚の表層だけが異様に寒冷を感じてふるえるようであった。(1/329頁)

… Es war seltsam kalt, und sie fröstelte. Eigentlich konnte in dieser Jahreszeit die nächtliche Temperatur kaum so weit gesunken sein, und doch hatte sie das Gefühl, als überziehe sich ihr Körper mit Gänsehaut. (…)/ Es war, als befände sich etwas in ihrer Brust, ein Herd, der permanent Hitze erzeugte und ihren Körper glühen ließ, obwohl sie zitterte und ihre Haut sich abnorm kühl anfühlte. (S.283)

The air felt strangely cold to her. It still ought not to be so very cold at night, and yet she felt as if goose pimples were standing out all over her skin. (…)/ It was as if a source of glowing heat rose within her breast and spread throughout her body – but failed to reach the skin, which seemed abnormally cold, almost freezing. (pp.224-225)

(12) は語り手が聖子の視点をとっての描写である。それを受けて、ドイツ語は「彼女 (聖子) がそのような気持ちを持った」という表現にしている。(4) や (10) と同様の処理である。

以上、12例紹介したが、『楡家』原作では語り手が場面に応じて自在に作中人物の視点に立って語っていること、しかしそれをそのままドイツ語に翻訳するわけにはいかないことが見て取れたのではないだろうか。

2.1.2. ダイクシス表現

ダイクシス表現 (直示表現) の使用からも、語り手の視点が場面に応じて移動していること

がわかる。

- (13) 背後の待合室からころがるように人々がとびでてくる。うつ伏せのまま揺られつづけている城吉は、眼前に次のような光景を見た。(I/280頁)

Aus dem Warteraum hinter ihm stürzten Menschen heraus, taumelnd und übereinanderfallend. Mit dem Gesicht nach unten auf dem Boden liegend, von den Druckwellen noch immer durchgeschüttelt, sah Shirokichi folgende Szene: (S.240f.)

People came tumbling and staggering out of the station waiting room behind him. / As Shirokichi lay on the still swaying earth he observed a two-storied house on the other side of the station square. (p.191)

(13) は関東大震災が発生したときの描写である。原文では語り手が城吉の視点を取って語っているのだから、単に「背後」「眼前」となっているが、ドイツ語訳では誰の背後であるかを示す ihm (英訳 him) のついた表現になっている。なお「眼前」の方は独英とも特に訳出していない。

- (14) 「あれがスマトラですよ。スマトラの本島です」/隣に立った船の士官が言った。(I/294頁)

»Das ist Sumatra, die Hauptinsel«, sagte der Schiffsoffizier, der neben ihm stand. (S.253)

“That’s Sumatra, the main island,” the ship’s officer standing at his side informed him. (p.201)

(14) は徹吉がドイツ留学から帰国する際の船上での会話である。原文は語り手がここでは徹吉の視点を取っているのだから、単に「隣に」としているが、ドイツ語訳では neben ihm (英訳 at his side) と、彼(徹吉)の隣であることを明示している。

- (15) 桃子は、そんなことをとりとめなく、憑かれたように眩きつづけた。そしてふと視線を転ずると、下田の婆やに抱かれた聡がいつの間にか泣きやんで、泣いたあとの穢ない顔を こちらに向けているのに気がついた。(…) 後方で心配げに彼女を呼ぶ下田の婆やの声がした。(…) かたわらに珍しく、罪のない顔をして両腕をひろげて眠っている聡をおいて。(I/349-350頁)

Momokos Gemurmel ging weiter, wirr und ohne Zusammenhang, fast so, als wäre sie besessen. Plötzlich irrte ihr Blick zur Seite und sie bemerkte ihren eigenen Sohn, Satoru, der schon bald zu weinen aufgehört hatte, nachdem ihn Tante Shimoda in den Arm genommen hatte, und dessen tränenverschmiertes Gesicht nun in ihre Richtung sah. (….) In ihrem Rücken rief Tante Shimoda besorgt ihren Namen, (….) Neben ihr lag Satoru, ausnahmsweise schlafend, mit unschuldiger

Miene und ausgebreiteten Armen. (S.298f.)

Momoko went on mumbling this sort of thing for some time, apparently entranced by the child, but then she happened to look to one side and see her own. Satoru had indeed stopped crying soon after he had been passed over to Nanny Shimoda, but he had turned his grubby, tear-stained face in his mother's direction and she had sensed he was looking at her. (….) Behind, Nanny Shimoda was calling out to her in a worried voice, (….) Satoru was having one of his rare quiet spells, sleeping innocently beside her with arms outstretched. (pp.237-238)

(15) も (13) や (14) と同様に、原文では語り手の視点が当該の作中人物（ここでは桃子）の視点に同化しているので、単に「こちら」「彼方で」「かたわらに」となっているが、ドイツ語訳には「彼女の」を示す所有冠詞や人称代名詞が添えられている。英語訳もほぼ同様である。

以上のように、ダイクシス表現を含む文例からも、日本語の語り手が自在にその都度の作中人物の視点に立って語っていることがわかる。

2.1.3. ル形

ル形というのはいわゆる日本語の動詞の「現在形」のことだが、西洋の小説が原則基本的に過去形で語られるのに対し、日本語による小説は、タ形（いわゆる「過去形」）だけが連続するということは逆にまれである。これも語り手が神の視点、全知視点から語るのではなく、実況中継的にその場に降り立って語ることの表れと見なせる。ル形（現在形）やダイクシス表現などによる視点の移動の効果に関して、サイデンステッカーと安西徹雄が述べていることを紹介しておこう。

- ・臨場感が高まり、読者は登場人物と共感しやすくなる。
- ・英語の文章では、日本語の文章のように、主観的な視点（登場人物の視点）と客観的な視点（著者の視点）とを入れまぜることは、パースペクティブの喪失を意味する。
- ・英語：ある一つの固定した視点から、対象を全体的・客観的に統一的なパースペクティブのもとに見る。
- ・日本語：固定した視点にこだわらず、自由に対象に密着し、「物体を撫でまわすように」してものを捉える。¹¹⁾

つまり日本語では、現在形やダイクシス表現を使うことにより、臨場感が高まり、読み手が

11) サイデンステッカー / 安西 (1983) : 71 頁の内容を宮内がまとめたものである。

作中の人物と共感しやすくなる、という効果が期待されるのである。

- (16) とにかくさまざまの事柄が起る。だが、さて思い返してみると、一体何があったのか？ あんなこと、こんなこと、それは確かにあったのだ。しかし今は何時いつだろう？ 正月が、院長の参内が、あの途方もない事件が起ったのはついこの間のように思っていたのに、もう暮が迫っている。ふたたび賞与式が、餅つきが、大掃除が近づいている。一体この一年なにがあったのか？ (I/127-128頁)

Jedenfalls waren verschiedene Dinge geschehen, doch wenn man zurückblickte, fragte man sich, was denn nun eigentlich geschehen war. Dies und jenes war ohne Zweifel passiert. Doch wie viel Zeit war vergangen? Neujahr, die Audienz des Direktors im Palast, jener verrückte Zwischenfall – es kam einem vor, als sei all dies erst kürzlich geschehen, tatsächlich aber neigte sich das Jahr bereits wieder dem Ende zu. (S.116)

Various things had certainly occurred, but it would be difficult to say if anything had really happened, for what real changes had any of these things led to? The extraordinary events of the New Year simply slipped into the past, as the end of the year came around again bringing yet another New Year's Day. The prize giving took place again, the rice pounding and cake making, the great year-end cleaning; and so what images had the old year left, (…)(pp.88-89)

(16) は日本語による語りが実況中継的で臨場的な表現を得意とすることがよくわかる箇所である。¹²⁾ 原文ではル形（現在形）の文が、ドイツ語では過去完了形になっている。日本語の語りでは「いつも今」であり、「今」の連続として時間が流れていく。一方、西洋の小説は、すべてが終わってからの振り返りとして語られ、それゆえ俯瞰的な視点を取ることになる。大河小説は一群の人々の歴史を時代の流れの中で描くというものであるから、時をどのように流していくかはとりわけ大事な問題である。¹³⁾

2.1.4. オノマトペ

オノマトペは日本語では大変好まれ、よく発達している表現であるが、オノマトペの使用も語りの臨場感を高める効果がある。『楡家』でも駆使されていて、ユーモアに満ちた語り口の

12) 参照：宮内（2013）。宮部みゆきの作品には日本語らしい「地上の視点」が顕著にうかがわれる。ちなみに映画監督の小津安二郎は、俯瞰は上から目線だとして嫌い、ローアングルを好んだという。

13) ドイツ語版のあとがきに、本作の時の移行の示し方に触れているくだりがある。新聞記事を朗読するのを趣味とする脳病院の患者ピリケンさんという作中人物を設定するという方法が評価されている（Klopfenstein（2010）：S.978-979）。

形成に大いに寄与している。

- (17) いつも彼は必要以上にせわしく算盤をはじいている。首をのばして帳簿をのぞきこむ。それから不安に堪えかねたように天井を見あげる。また算盤をぱちぱちやる。ついでよろよろと立上り、事務室の隅にある金庫の前にかがみこむのだ。神経質にぎざぎざのある重い文字板を合わせ、どっしりとした扉をひきあげ、内部を覗きこんでなにやらぶつぶつ呟いている。それからのろのろと扉をしめ、机に戻り、ふたたび帳簿を見やって吐息をつく。(I/42頁)

Er war ständig mit seinem Abakus zu Gange, auf dem er mit unnötiger Hast Berechnungen anstellte. Nach jeder mathematischen Operation streckte er den Hals, um in das Kontobuch zu spähen. Dem folgte regelmäßig ein verzweifelter Blick zur Decke, gespeist aus nicht zu ertragender Unsicherheit. Und wieder clickten und klackten die Kugeln des Abakus. Die Frage war nur, was machte der Tresor? Ōishi erhob sich schwankend und kauerte sich vor dem Geldschrank nieder, der in einer Ecke des Geschäftszimmers stand. Er drehte nervös an der großen, geriffelten Scheibe des Kombinationsschlusses, bis er die gewünschten Zahlen eingestellt hatte, dann zog er die schwere Tresortür auf und lugte hinein, während er Unverständliches murmelte. Langsam schloss er die Tür wieder, kehrte zum Schreibtisch zurück und blickte abermals in das Kontobuch, begleitet von einem tiefen Seufzer. (S.41)

He spent the whole working year grimacing at or merely contemplating his account ledgers, or making mostly unnecessary flourishes and rattlings of his abacus, or pausing to peer once more into his accounts, then looking in almost agonized fashion at the ceiling, a general distrust of men and their calculations scrawled across his neurotic face, and so back to the abacus again, click clack click clack, until finally it would be too much and he would lurch waveringly to his feet, wander across to the safe, and crouch down before it. This act was the ceremonial center of his days. He would nervously creak the knob of the combination into its various positions, swing the heavy door open, peer inside while muttering unintelligibly to himself, then heave the door to. That done, he would return to his desk, open his ledger again, then sigh and mutter over his accounts once more. (p.27)

- (17) の訳を見てみると、原文のオノマトペを生かした訳を目指しているのが見て取れるが、そうとはいえすべてをオノマトペとして訳すのはドイツ語や英語の言語感覚からは過剰らしく、大方はふつうの形容詞や副詞で対応させざるを得ないこともわかる。

2.2. 多用されている自由間接話法への対応

日本語の小説では自由間接話法が駆使されることが多いが、『楡家』もその例外ではない。話法における視点の移動（自由間接話法）の効果についてサイデンステッカーと安西徹雄が述べているところを紹介しておこう。

- ・客観的な間接話法と、人物の主観に密着した直接話法的な視点との間を往復する。
- ・三人称的な地の文の中に、一人称的な、人物の心の中のつぶやきの言葉を織り込み、客観と主観、純粋な間接話法と純粋な直接話法との中間を縫っていくような話法である。
- ・英語にも「描出話法」(represented speech)あるいは「自由間接話法」(free indirect speech)と呼ばれるものがあるが、日本語ほど融通無碍に駆使することはできない。一般的な傾向として、やはり、話法における視点の移動の場合にも、時制についてと同様、英語は日本語ほど自由ではない。¹⁴⁾

- (18) なるほど四年まえ、彼がこの養父の長女を妻と呼べるようになったとき、彼はたしかに感激したのを記憶している。龍子は自分のような者からあきらかに一段高い場所にいる、生粋の都会育ちの学習院出の令嬢なのだ。しかしいま、懐かしい血をわけた弟が無礼講に東北弁を吐きちらかしているのに対し、ひややかに無関心をよそおっている妻を眺めていると、それが寝室を共にする女どころか、今まで一度も会ったこともない、芯の芯まで赤の他人のように思えてくるのをどうするわけにもいかなかった。彼女はたしかに自分のものではなかった。龍子はあくまでも楡家の、基一郎のマニアじみたはったりとひさの目に見えぬ古い血の織りなせるあやしげな意志にあやつられている女なのだ。せめて峻一がここにいたなら。あの子には少なくとも半分自分の血がまじっているはずだ。
- (1/89頁)

Gewiss, er erinnerte sich, wie überwältigend das Gefühl gewesen war, als er vier Jahre zuvor die älteste Tochter seines Adoptivvaters endlich als seine Frau bezeichnen konnte. Denn stand sie nicht fraglos über einem Menschen wie ihm, sie, die Tochter aus gutem Haus, Absolventin des Gakushūin und das unverkennbare Produkt einer Großstadt? Doch beim Anblick von Ryūko, die Shirokichi, in dessen Adern sein eigenes Blut floss, mit kaltem Desinteresse begegnete, seinem Bruder, der jenseits gesellschaftlicher Konventionen hemmungslos in seinem nördlichen Dialekt brabbelte (einer Sprache, bei der Tetsukichi Sehnsucht nach der Vergangenheit empfand), überkam ihn das hilflose Gefühl, dass das nicht die Frau war, mit der er ein Schlafzimmer

14) サイデンステッカー / 安西 (1983) : 75-76 頁の内容を宮内がまとめたものである。

teilte, sondern ein durch und durch fremder Mensch, den er noch nie gesehen hatte. Nein, sie gehörte ihm nicht. Ryūko wurde in allem und jedem vom Willen des Hauses Nire beherrscht, diesem rätselhaften Geflecht, gewoben aus Kiichirōs Großmannssucht mit ihren Anflügen von Besessenheit und Hisas uraltem, unsichtbarem Blut. Wenn wenigstens Shun'ichi noch im Zimmer wäre! In den Adern des Kindes floss zumindest zur Hälfte sein eigenes Blut. (S.83)

It is true that he could remember his own excitement when, four years ago, he had been able to refer to his benefactor's eldest daughter as his wife, because he had felt then that Ryuko was someone superior to himself, of a different order of existence, a young lady brought up in the cultured world of the capital and of the most prestigious private school in the country. But when he looked at her now and saw the frigid indifference with which she treated his brother, who, though blabbering away in his yokel dialect, was after all his brother, and the dialect was his own and he felt homesick to hear it, then he wondered if he knew anything about her at all. Was this the woman he shared his bed with? Wasn't she, rather, a complete stranger to him, someone he had never once truly met? She was a product of the Nire view of life, someone who responded solely to the combined dictates of Kiichiro's obsession with the superswindle and Hisa's more complex legacy of ancient, aristocratic blood. He no longer believed or trusted in any of it, but while Shun'ichi had been there in the room, he could feel that something reflected him, since at least half of that child's blood was his own. (pp.61-62)

(18) 原文の波線下線部は徹吉の内言である。その部分をドイツ語は体験話法を用いて訳している。

(19) ただ彼女は、こんなふう思った。「それごらんさい。ちゃんとうなるのよ。あたしがこうと思ったことは、ちゃんとそうなっちゃうんだから」/ 幸いなことに、このたびは和歌は見当らなかった。愉しかった海の生活をときどき追想している、自分の家は渋谷にあるが、友人が住んでいるため屢々青山を訪れる、このあいだお宅の病院のまえを通り、あなたのことを思いだした、というような文字が几帳面に記されてあった。「わざわざ調べにきたんだわ」/と、桃子は考えた。「うちの病院が大きくて資本家なのはまずよかった。これで貧しい長屋にでも住んでいれば、それこそ薄幸の身になるのだわ」/友人の家はお宅とごく近い、何日にも友人を訪ねる約束だが、夕刻早くには元ノ原をしばらく散歩するつもりだ、原っぱのはずれに大きな松の木があるが、もしその辺でばったりお会いすることでもあったら非常に嬉しいと思う、とその手紙は結んであった。べつに彼女のことを讚美したり、ローマン的な文句はなかった。「男なんて

みんな不良よ」と、桃子は片手でちんまりとした鼻の下をこすった。「誰もが似たようなことを書くんだわ。どんな女でも、そんなところへのこのこ出かけてゆくとも思っているのかしら。それに、元ノ原なんて病院のすぐ前じゃないの。ほんとに常識がない」(1/222-223頁)

Jetzt sich sich einer das an! Ich wusste, dass es so kommen würde. Und genauso, wie ich's mir gedacht hatte, ist es gekommen! / Glücklicherweise entdeckte sie in diesem Brief nirgendwo ein Waka. Yasudas Handschrift war klar und penibel. Er schrieb, dass er sich oft an die schönen Tage am Meer erinnere. Er selbst wohne zwar in Shibuya, besuche aber gelegentlich einen Freund in Aoyama und sei kürzlich an der Nire Klinik vorübergegangen, wobei er sich an sie erinnert habe. / Er hat den weiten Weg auf sich genommen, um zu sehen, wo ich lebe!, dachte Momoko, direkt ein Glück, dass die Klinik so groß ist und wir zu den Kapitalisten gehören. Würde ich in einem ärmlichen Mietshaus wohnen, müsste ich mich wirklich zu den Frauen zählen, die unter einem unglücklichen Stern geboren wurden. / Er habe, schrieb Yasuda weiter, seinem Freund versprochen, ihn in den nächsten Tagen zu besuchen. Dessen Wohnung liege ganz in der Nähe von ihrem Zuhause, und er beabsichtige, am frühen Abend einen Spaziergang in Moto-no-hara zu machen. Er würde sich überaus freuen – so schloss der Brief –, wenn der Zufall es wolle, dass er sie bei der großen Kiefer am Ende der Wiese treffen würde. Nirgendwo fand sich eine positive Bemerkung über ihre Person, nirgendwo eine romantische Sentenz. / Männer! Von denen taugt doch keiner was!, dachte Momoko und rieb die Stelle unter ihrer niedlichen Nase. Diesen Brief hätte jeder schreiben können. Was denkt er eigentlich? Dass eine Frau schamlos genug sein könnte, um sich mir nichts, dir nichts mit ihm an einem derart unmöglichen Ort zu treffen? Auf dieser Wiese, die gleich neben der Klinik liegt? Der Junge hat wirklich keinen Verstand! (S.193)

But she managed to coax a sense of satisfaction out of it: / “You see. It’s all turned out as I thought it would. If I really put my mind to something then things always turn out as I know they will.” / Luckily there appeared to be no poems attached to this one. It said that he often recalled the happy days they had spent at the seaside. He himself lived in Shibuya, but he occasionally visited a friend in Aoyama, and he had happened to pass by the hospital one day and had remembered that was where she lived. The contents were all very proper, and written in a precise hand. / “So he came all this way to investigate,” Momoko decided, even though Shibuya itself was not much of a distance away. “Lucky we live in this impressive place and are pretty obviously capitalists. If this were some barrack of a building then I really would have to reconcile myself to being ill-fated.” / The letter went on to say that he would shortly be visiting his friend again and that he intended to walk a little in Moto-no-hara (the field near the hospital)

some time toward evening, and how happy he would be if he were to unexpectedly bump into her near the large pine tree in the far corner of the field. There were no romantic phrases in praise of her beauty. / “Men. They’re all the same. Heartless deceivers ever,” thought Momoko, rubbing the skin beneath her small nose with her finger. “The kind of letter anybody might write, and I suppose he thinks a woman will just trip along for an assignation in a place like that. Hasn’t he any sense at all? It’s right next to the hospital for a start.” (pp.150-151)

(19) は桃子の内言と安田の手紙の内容が混じり合っている箇所である。内言は原文では直接話法でカッコにくくられて書かれているが、ドイツ語訳では波線下線部のように引用符もつけずに直接話法にされている（ただしところどころ原文にはない「桃子は思った」が補われている）。安田の手紙の内容は、原文では自由間接話法で書かれているが、ドイツ語訳では接続法第1式を用いた間接話法になっている。

3. まとめと考察

以上、『楡家』の語り手の視点の微妙さ・自在さについて文例を挙げて具体的に見てきた。ダイクシス表現によって語りの視点が移動しているさまを確認し、ル形の混用やオノマトペの多用がいきいきとした実況中継的表現に与していることが確認できたと思う。自由間接話法の多用も、語りの視点の自在さにつながるものである。

日本語の小説が、熊倉千之が言うように「語り手の声を消せない」のは、日本語の表現が「地上の視点」と結びついていることと関係がある。日本語が俯瞰ではなく、「地上の視点」からの表現を得意とすることとつながっている。それゆえ日本語は「私小説」に適した言語とも言えるが、¹⁵⁾ 三人称小説の場合も語り手が作中人物のいずれかに憑依するような感じで語ることになる。¹⁶⁾ そして『楡家』のような大河小説では、語り手は場面によっていろいろな作中人物の視点を取って、物語を続けていくことになるのかもしれない。¹⁷⁾ そうだとすると、ユーモアやイロニーのような、ものの見方・捉え方と関わる表現において、日本語と西洋語ではかなり違うもの、あるいはだいぶ異なるスタイルのものにならざるを得ないのではないか。つまり、語りのパースペクティヴの定まらない日本語によるユーモアやイロニーは、全知視点による語りを旨とする西洋語の小説の場合とは異なるのではないだろうか。

北杜夫と旧制松本高校で一緒にすごし、のちにやはり作家になった辻邦生が、本作の文庫版

15) というより、日本語のこの特性ゆえに私小説が興隆したと言ふべきかもしれない。

16) 落語という日本独特の話芸の特徴と通じるところがある。

17) 例えば、第1部第5章は桃子、第7章と第9章は徹吉、第Ⅲ部の第7章は峻一の視点と重なる。

に解説を書いている、そこで『楡家』のユーモアについて次のように述べている。

人々の「宿命」は、それぞれの時代、環境、特殊な条件によって別個の姿をとりながら、なおそこに、われわれがどうすることもできぬ「宿命の原型」のようなものが立ち現われる。しかし『楡家』には、宿命の決定論的な暗さはない。それはむしろ「生れ、そして死んでゆく人間」であることへの、哀感にみちた歓喜で彩られている。この作品を特徴づけるあたたかなユーモアは、ただそのことによるのみ説明される。/ もちろん千五百枚をこえる大作が単なる主題と情感だけで支えられるものではない。そこには作者の並々ならぬ小説技法への配慮が働いている。一例を挙げれば、楡一族の背後を流れる時代を象徴する事件、風俗は、つねに小説中の人物の視点からのみ眺められている。¹⁸⁾

また、北杜夫と辻邦生は対談の中で、『ブッデンブローク家』の語りについて次のように述べている。

辻 望月市恵さんが『ブッデンブローク家……』の新訳のあとで、マンのことを書いていて、マンの作品は、世界を上から俯瞰しているような視点で書いている、と言っておられる。(…) すべてのもを、いま言ったような〈高み〉から見られるようになると、同じそういう事件ですら、〈喜劇〉と見られるようになる……。

北 〈高い〉、あるいは〈距離〉だね。¹⁹⁾

対象を高いところから見たり、距離をとって観察する。北と辻の二人が語っているように、「喜劇」を書くにはそういう態度が必要である。それを表現する際に、日本語とドイツ語ではどのような違いが生じるのか、この点についてこれから考えていきたい。語り手の視点と諧謔表現の関係、『楡家』と『ブッデンブローク家』のユーモア感覚の比較を、今後の課題として挙げておく。その考察の際に認知言語学の「共同注意」という考え方も援用できるかもしれないと考えている。²⁰⁾

18) 『楡家の人びと』(文庫版)の辻邦生による解説(Ⅲ/378-379頁)。

19) 北/辻(1974):106-108頁。

20) 守屋三千代は次のように述べている。「〈共同注意〉の援用により、例えば「神の目」なき日本語の小説では語り手は登場人物と〈共同注意〉の立場で人物の内面を語り、読み手と〈共同注意〉の立場で人物の動きや外界を語り、また〈共同注意〉なしに描写をし、それに応じて文体が使い分けられると説明できるかもしれない。」(守屋(2006):67頁)

使用テキスト

北杜夫『榎家の人びと』（第Ⅰ部・第Ⅱ部・第Ⅲ部）新潮文庫，2013年（第6刷）。

Kita Morio: *Das Haus Nire: Verfall einer Familie*. Aus dem Japanischen übersetzt von Otto Putz, Berlin (be. bra), 2010.

Morio Kita: *The house of Nire*. Translated by Dennis Keene, New York (Kodansha international), 1984.

参考文献

池上嘉彦（2006）：「〈主観的把握〉とは何か：日本語話者における〈好まれる言い回し〉」、『言語』2006年5月号，20-27頁。

池上嘉彦（2011）：「日本語と主観性・主体性」、『主観性と主体性（ひつじ意味論講座 第5巻）』ひつじ書房，49-67頁。

井出祥子（2006）：『わきまへの語用論』大修館書店。

伊原紀子（2008）：「日・英小説の語りに表れる「声」：自由間接話法とその翻訳」、『社会言語科学』第11巻第1号，151-163頁。

北杜夫/辻邦生（1974）：『若き日と文学と〈対談〉』中公文庫。

熊倉千之（1990）：『日本人の表現力と個性：新しい「私」の発見』中公新書。

熊倉千之（2006）：「〈主観〉を本質とする日本文学：語り手の声が出する世界」、『言語』2006年5月号，28-34頁。

E.G. サイデンステッカー/安西徹雄（1983）：『日本文の翻訳』大修館書店。

成田節（2012）：「翻訳と語り手の視点：三人称物語における情景描写を例に」、『竹内義晴（編）『翻訳という問題から見えてくる言語、文化、人間』、日本独文学会研究叢書，第85号，22-39頁。

廣瀬幸生/長谷川葉子（2010）：『日本語から見た日本人：主体性の言語学』開拓社。

宮内伸子（2009）：「『自然の成り行き』と『空気』のドイツ語への訳され方：吉本ばなの『キッチン』の訳を手がかりに」、『日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研究』第7号，61-79頁。

宮内伸子（2010）：「日本語の直喩表現はどのように翻訳されているか：三島由紀夫の『愛の渇き』のドイツ語訳を手がかりに」、『日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研究』第9号，92-122頁。

宮内伸子（2013）：「日本語らしい『地上の視点』を探る：宮部みゆきの『火車』における恩恵授受表現のドイツ語訳を手がかりに」、『日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研究』第10号，43-74頁。

守屋三千代（1992）：「小説の中の視点と文法：時制と相を中心に」、『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第4号，98-120頁。

守屋三千代（2006）：「〈共同注意〉と終助詞使用」、『言語』2006年5月号，62-67頁。

Klopfenstein, Eduard (2010): Nachwort von *Das Haus Nire: Verfall einer Familie*. Berlin (be. bra), S.967-981.

